

## 多言語社会における日・朝・中三言語使用の有効性と限界：中国朝鮮族の日本語教育を事例に

永嶋，洋一

<https://doi.org/10.15017/1654601>

---

出版情報：Kyushu University, 2015, 博士（比較社会文化），課程博士  
バージョン：  
権利関係：Fulltext available.



氏名	永嶋 洋一		
論文名	多言語社会における日・朝・中三言語使用の有効性と限界 —中国朝鮮族の日本語教育を事例に—		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 松永 典子
	副査	九州大学	教授 松原 孝俊
	副査	九州大学	准教授 阿部 康久
	副査	九州大学	准教授 HALL Andrew
	副査	北陸先端科学技術大学院大学	教授 本田 弘之

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、中国朝鮮族の日本語、朝鮮語、中国語という三言語使用の事例をもとに、複数の言語を用いた日本語教育方法及び学習方法の有効性について探求するものである。本研究の意義は、日本語、そして日本語との共通点が見られる朝鮮語及び中国語という東アジア三言語使用による朝鮮族の日本語教育の教育方法及び学習方法の有効性を検証し、複言語使用による日本語教育のモデルを新たに提示した点にある。

従来の東アジアの日本語教育研究においては、複言語・複文化主義に基づく言語教育が展開されている欧米とは異なり、社会の多文化化、グローバル化に対応した教育方法論についての研究の伸展が遅れているという現状がある。そこで、本論文では、朝鮮族の複言語使用の実態に注目し、その日本語教育方法と日本語学習方法を文法、語彙、表記といった側面から具体的に解明し、日本語教育における複言語使用の有効性の検証を試みている。研究方法としては、先行研究を参照しながら、インタビュー調査（計 52 名）、アンケート調査（計 604 名）、及び授業見学（3 教育機関）を実施し、その調査結果をもとに分析し、考察を加えている。

本論では、大きく 3 つの研究課題が挙げられている。①現在、朝鮮族学校で行われている三言語使用による日本語教育方法は、単一言語使用、及び二言語使用による日本語教育方法とどのような違いがあるのか。②朝鮮族教師は日本語を教える際、どのように三言語を使い分けているのか。③朝鮮族学習者は日本語を学習する際、三言語をどのように使い分けているのか。以上 3 つの研究課題について言語教育学的观点から、三言語使用による日本語教育の有効性を検証している。

本論は大きく 6 つの章で構成されている。第 1 章では序論として、まず研究背景を述べ、用語の定義及び表記、研究目的を示している。さらに、先行研究について概観し、その問題点を指摘した上で、研究課題を提示し、研究方法、本論の構成を紹介している。

第 2 章は、課題①について、朝鮮族教師の教育方法、特に言語使用に注目しながら、時代ごとに比較、検討している。「満洲国」期の「朝鮮族」教師の教育方法は、日本語及び朝鮮語の二言語使用による折衷法であり、改革開放期以降は「満洲国」期に日本語教育を受けた「老一代」教師による日本語教育が行われた。2000 年代になると、「漢語化」の影響で、教授用語として中国語が使われるようになり、日・朝の二言語では理解が難しかった表現についても、中国語による理解が可能となり、三言語を使うことで日本語の理解がより深まっていることを指摘している。

第 3 章では、課題②の朝鮮族教師の三言語使用による教育方法について、学校別、教師別に明らかにしている。その結果、単一言語だけでは解釈が難しい文法表現については、他の言語を使用することによって解釈し、理解させる「補完的理解」を促す教育方法が見られた。さらに、ひとつの

日本語の単語や文法表現についても、三言語で解釈し説明することで、より理解を深めさせる「相乗的理解」を促す教育方法も見られたことを指摘している。

第4章では、課題③について、朝鮮族学習者の言語能力に注目しながら、三言語使用による日本語学習方法の実態を学校別、学習者別に明らかにしている。その結果、学習者も日・朝・中三言語を使い分けて日本語を学習しており、それにより「相乗的理解」と「補完的理解」が可能となることから、多くの学習者が教師の三言語による教育方法を望んでいることを示し、三言語使用の有効性を提起している。

第5章では、複言語使用による日本語教育の可能性を展望している。

最後に第6章では、中国朝鮮族の三言語使用による日本語教育についてまとめ、東アジアにおける三言語使用による言語教育の有効性と限界について考察し、結論としている。

以上のように、本論文では、中国朝鮮族の日本語教育を事例に、東アジアの三言語を使用した相互補完的な教育方法、学習方法の有効性と限界を示した点に新規性が認められる。特に、「相乗的理解」と「補完的理解」という新たな概念を提起することにより、複言語使用による日本語教育のモデルを提示した点は、本論文の独自性をアピールする点として論文調査委員により高く評価された。

また、東アジアにおける複言語使用による言語教育方法論の可能性を展望している点は、複言語使用による日本語教育の、さらに汎用性のあるモデル化を見据えたものとなっていると言える。この点に関しては、今後さらなる検証が求められるとは言え、複言語を使用した相互補完的な教育方法、学習方法の可能性に大きな示唆をもたらすものとなっている。

したがって、本論文は博士（比較社会文化）の学位に値すると論文調査委員全員一致により判断された。